

Vihāra Project

【ヴィハーラ プロジェクト】

September
2024

Vol.11

科学研究費補助金基盤研究(A)

「グプタ朝以降のインド仏教における僧院と世俗性」

(課題番号:22H00002 英文タイトル:“Monasteries and Secularity in Indian Buddhism from the Gupta Period Onward”)

ニュースレター第11号

美術・建築・考古学研究班によるインド調査報告

2024年1月4日から22日にかけて、美術・建築・考古学研究班は西デカン海岸地域(コンカン)、東マールワー、グジャラート北部の仏教僧院遺構の調査を行った。班員3名、すなわち筆者、Abhishek Amar(ハミルトン・カレッジ)、Nicolas Morrissey(ジョージア大学)の他、Pia Brancaccio博士(ドレクセル大学)がグジャラートを除く全ての調査に同行し、コンカン地方の調査にはVincent Tournier博士(ルートヴィヒ・マクシミリアン大学ミュンヘン)も参加した。今回で3度目となるムンバイ近郊のカンヘーリー石窟の調査では、これまで十分な時間を割くことができなかった北丘の窟群(第17窟から第30窟)の記録と、昨年訪れた南丘の集団墓地(第87窟)の再調査を行った。また、Tournier博士の調査により、現在カンヘーリー研究の基礎資料として広く用いられているShobhana Gokhaleの碑文集成には修正の余地があることや、収蔵庫に収められている第87窟出土の墓碑銘文の中に未発表の銘文が含まれていることを確認できた。カンヘー

リー調査の後、クダーを経てマハードに移動し、同地域に点在する仏教石窟群を訪れた。特に興味深かったのはマハードの南80キロほどに位置するパンハーレー・カーギー石窟で、台座に金剛杵を刻んだ第6窟の仏陀坐像(図1)や、宝剣を振り上げた第10窟の菩薩形像(不動明王/チャンダマハーローシャナに比定されている)や、行者の様々な姿を現した第14窟の浮彫など、コンカンで行われた後期密教の様相を窺わせる貴重な作例が残されている。インド考古局の報告書以外にほとんど情報がなかった同石窟を詳しく調査することができたのは、大きな収穫であった。

続いてマディヤプラデーシュ州のサーンチーに移動し、東マールワー地方の僧院遺構を調査した。サーンチーおよびその周辺には紀元前3世紀から紀元後2世紀頃に建てられた古代仏塔(ビルサー塔群)だけでなく、グプタ時代以降の僧院遺構や彫刻が数多く残されている。また、サーンチー北東のヴィディシャーやサーガル地域には、ウダヤギリ、エーラン、バドー・パターリ、ギャラスプルといった、グプタ時代からプラティハール時代のヒンドゥー寺院遺構が点在する。今回その両者を訪ねたことで、当地のヒンドゥー建築が同時代の仏教建築に与えた影響を確認できた。例えば、サーンチー大塔を見下ろす位置に築かれた第45寺院址(10世紀から11世紀頃)は、巨大な仏坐像を安置した主祠堂の両翼に3つの副祠堂を配したプランにオディシャ(旧名オリッサ)のラトナギリ第1僧院祠堂(11世紀頃)との類似が指摘できる一方、寺院中庭に残された大量の屋根の部材の形状から、祠堂の上にはプラティハール時代のヒンドゥー寺院と同型の高塔(シカラ)を載せていたことがわかる(図2)。同地方における両宗教の違いは、少なくとも寺院建築の上では、それほど大きいものではなかったように感じられた。



図1 仏陀坐像、パンハーレー・カーギー第6窟



図2 主祠堂、サーンチー第45寺院址

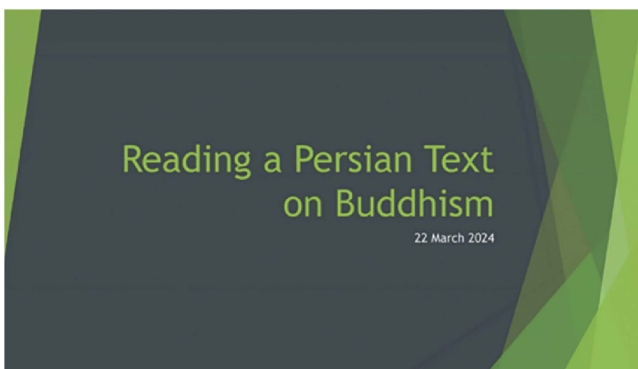
その後グジャラート州のアフマダーバードに移動し、同州北部の遺跡調査を行った。まず訪れたのは、2016年の発掘でマトゥラー製の仏陀像と仏教伽藍址が見つかったヴァドーナガルである。遺構は市街地の中にあるため、その全貌を発掘で明らかにするには至っていないが、中庭を取り囲むように僧房を設けた僧院のプランや、僧院に隣接する小規模

の仏塔が確認できた。一方、仏陀像は新博物館の建設工事に伴い収蔵庫に移されたらしく、実見はかなわなかった。アフマダーバードとヴァドーダラー（旧名バローダ）の博物館調査では、最後に訪れたバローダ大学考古博物館で、同大学が発掘したデーブニ・モリー仏塔の出土品を精査する機会を得た。また、同博物館の展示により、カンバリダ（Khambhalida）やタラジャ（Talaja）など、ほとんど研究のないグジャラート南部の仏教石窟についての情報を得ることができた。インダス文明の都市遺跡であるロータルやドーラヴィーラ、アショカ王の磨崖法勅で知られるジュンナガルなど、古くから東西を結ぶ交易の要衝として栄えたグジャラート地方であるが、確認されている仏教遺跡の数は驚くほど少ない。今後のさらなる調査が待たれるところである。

（報告：班責任者 島田明
ニューヨーク州立大学ニューパルツ校）

外部評価班による講読会の開催

外部評価班は、2021年3月7日と6月27日に、イルハン朝時代のタブリーズで編纂されたペルシア語歴史書、アブルカーシム・カーシャーニーの『歴史精髄』に含まれる仏伝の講読会を開催してきた。過去の講読会に引き続いて、2024年3月22日に、『歴史精髄』仏伝のうち、地獄に関する章の講読会をオンラインで開催した。イルハン朝時代のペルシア語史書の中では、ラシードウッディーンの『集史』がインド史・仏伝を含む作品としてこれまで注目されてきたが、『歴史精髄』は『集史』の参照元であったことが近年の研究で明らかになった。そのため、『集史』よりも古い情報を記録しているテキストとして価値が高い。



小倉氏による趣旨説明

これまでに開催した講読会では、「仏陀と天使の問答の章」「仏陀による弥勒到来の予言の章」を取り上げた。これらの章は、それぞれ『天請問経』『弥勒授記』がその典拠になっていることがGregory Schopenの研究で明らかにされており、サンスクリット原典やチベット語訳との比較を行うことはそれほど困難ではなかった。しかし、地獄に関する章はその典拠がいまだ特定されておらず、講読会では漢訳『長阿含経』『世記経』や『スッタニパータ』『コーカーリヤ経』などの地獄の記述と比較しつつ、『歴史精髄』の典拠となったテキストの記述を推測していくことになった。『歴史精髄』の地獄の章は、総じて人が生前どのような罪を犯したことで、死後それぞれの地獄に行くことになるかに関心が払われており、地獄で死者が受ける責苦に関する説明はそれほど多くない。また、八熱地獄の記述は比較的平板ながら、小地獄の記述に特徴があり、それがかえって典拠となった仏典の推測を難しくさせた。

読み進めていく中で、『歴史精髄』の地獄の記述が、仏典のみならずシヴァダルマ文献の地獄の記述とも類似するところがあるとの指摘があった。『天請問経』『弥勒授記』のケースとは異なり、『歴史精髄』の地獄に関する章の記述は、イン

フォーマントである仏僧カマラシュリーが口頭でカーシャーニーに説明した可能性、またその内容がシヴァダルマ文献の地獄の記述との間でコンタミネーションを生じている可能性も、今後は考慮すべきかも知れない。

イスラームによる仏教の地獄観の受容という点では、小地獄の説明の中に2か所、ザバーニヤへの言及があった。ザバーニヤとは、クルアーン96章18節で言及される、地獄で責苦を担当する天使である。また今回の講読会で、『歴史精髓』と『集史』それぞれの地獄に関する章の序文が、大きく異なることが明らかになった。『歴史精髓』の地獄に関する章の序文では、仏陀と対話者が人間の諸行為に対する応報の原因について対話をしており、そこで応報の原因を創造者(神)に帰する敵対者の見解を否定して、応報の原因を行為者自身に帰する見解を正としている。これはイスラーム、特にアシュアリー派神学の獲得論(人間の行為は神に

よって全て予定されており、人間は予め決められた行為を獲得するのである、という考え方)を否定して、仏教の業論を肯定しているともとれる内容である。そしてこの対話が、『集史』では大きく書き換えられている。『集史』の著者ラシードウッディーンは元タイランのユダヤ教徒の家に生まれ、イスラームに改宗してイルハン朝宮廷に出仕した後も、ことあるごとに政敵から、隠れユダヤ教徒の不信仰者との中傷をされていた。そのため、自ら輪廻の思想を否定するイスラーム神学書を著すなど、生前ラシードウッディーンは、自分にかけられた嫌疑を晴らすことに努めていた。そのような政治的立場にあって、『歴史精髓』に書かれていた仏陀と対話者との対話をそのまま引き写すことは、ラシードウッディーンには到底容認できなかったものと考えられる。

(報告:外部評価班 小倉智史
東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所)

中央アジアの仏教僧院をめぐる研究動向

1. 導入

仏教僧院は宗教的・教育的活動の役割に加えて、貿易や地域経済、中央行政(国の通信網など)にも関与していた。近年の研究は、新たな考古学的発見や、出土資料の文献学的研究に基づいて、僧院がそれらの世俗的活動にどのように積極的に関わっていたのかを明らかにしている。

2. 考古学上の発掘調査

2.1. テルメズ(ウズベキスタン)

ファヤズ・テペ、カラ・テペ、そしてズルマラの発掘調査では、僧院が保存状態の良い仏塔や遺跡とともに発見された。これらの遺跡は、インド・ギリシアの仏教美術の融合を示すものであり、2世紀のクシャーナ朝における初期仏教の発展への理解を深めるものである。2014年から2017年にかけては、立正大学とウズベキスタン科学アカデミーの共同研究として、カラ・テペの仏教遺跡での発掘調査が4回行われた(岩本篤志 2019 “A Study on the Prosperity and Decline of Buddhist Sites in Northern Bactria: Kara Tepe and Zurmala”参照)。テルメズで発見された種々の碑文については、2011年のPidaev氏、

Annaev氏、Fussman氏による共著 *Monuments bouddhiques de Termez*を参照されたい。また、影山悦子氏、石松日奈子氏、吉田豊氏によるJSPS科研費プロジェクト「新出資料によるウズベキスタン南部ファヤズテパ遺跡出土壁画の再検討」の研究成果として、2022年に「ウズベキスタン南部ファヤズテパ遺跡出土初期仏教壁画の保存修復と研究 2」が発行されている。

2.2. 新疆ウイグル自治区(中国)

この20年間、中国の新疆ウイグル自治区各地の古代仏教僧院のさまざまな遺跡で大規模な発掘調査が行われた。それらは通常、地元考古学機関と中国社会科学院による共同プロジェクトで、「丝绸之路(新疆段)重点文物保护单位」すなわち「シルクロード(新疆区間)重点文化財保護事業」のもと、中央政府から多額の援助を受けている。トルファン近郊の著名な遺跡である、トゥユク(吐峪溝、下記参照)、センギム(勝金口)、ムルトウク(木头溝)、ベゼクリク(柏孜克里克)、ハミ(哈密)、コチョ(高昌)では、数多くの考古学上の出土品が見つかった。考古学調査では仏教僧院の3次元復元などの最新技術が活用され、共同研究活動では学際的な手法が採用されている。

今後の予定

2024年10月8日に、外部評価班によるワークショップが京都大学で開催されます。今回は陳瑞翹先生(北京大学)をお招きして、中央アジア、特にコータンにおける仏教と世俗性について"Silkworm, Women, Animals, and Music: Royal Monasteries and Secularity in Khotan Through the Lens of *Numina*"というタイトルで講演していただく予定です。

活動報告

2024年6月16日に、写本文献資料研究班による国内研究会が開催されました。今回は *Sarvasamayasaṃgraha* の校訂テキストと和訳の再検討を進めるとともに、同文献がチベット仏教においてどのように受容されたかという問題について、活発な意見交換を行いました。2025年8月10日から15日までThe XXth Congress of the International Association of Buddhist Studiesがドイツのライプツィヒ大学で開催されます。本プロジェクトは、写本文献資料研究班を中心にTantric Ethics and Buddhist Monasticismというタイトルのパネルを開催するべく準備を進めています。

以上の活動の詳細については、ニュースレター第12号で報告する予定です。

2.3. 新疆のトゥユク

2013年以来、新疆ウイグル自治区の考古学的活動は、トゥユクの西部に関心が向いている。仏殿や僧房窟、貯蔵施設から成る、地上の僧院が発見されたが、これはトゥユクの大規模な石窟寺院群に属している。そこには少なくとも、6世紀から7世紀の麴氏高昌国の時期と、10世紀から14世紀の天山ウイグル王国の時期という2段階の建立の過程が認められている。そこでは帛画、織物、陶器、木工製品、青銅、鉄、石、および動植物の遺品、多くの壁画と仏像の破片、そして中国語や古代ウイグル語、ソグド語、チベット語、モンゴル語で書かれた写本、木版経典、世俗の文書などが発掘されている。また、馬の餌場と遺品の発見は、寺院群において国の通信網管理がかつて存在したことを物語るものともなっている。詳細や写真については、夏立棟氏、李裕群氏、王龙氏、张海龙氏による2019年の『新疆鄯善县吐峪沟西区中部回鹘佛寺发掘简报』を参照されたい。

3. 結論

中央アジアの仏教僧院における新たな出土品、そしてそれに対応する、世俗社会に関する発掘文書についての研究は、仏教伝来時の状況を知る上で有用なだけではなく、中央アジアにおける仏教と世俗性の相互関係について、深い理解を与えるものである。さらに、現地の人々の世俗的活動や他宗教との交流を考慮することで、中央アジアの仏教のより正確で明確な姿を再現することが可能となる。その中でも、西旁におけるネストリウス派の教会跡と、トルファンで発見された豊富なマニ教の写本(Yoshida Yutaka 吉田豊 2019 *Three Manichaean Sogdian letters unearthed in Bāzāklik, Turfan*『ベゼクリク千仏洞出土のマニ教ソグド語手紙文研究』参照)は、決定的な証拠となる。加えて、ベゼクリクでは一部のマニ教の洞窟を改築し、仏教信者たちのために再利用しているが、これも宗教の多様性を背景とした交流を示す一例となる。

今後の課題と展望として、政治的および安全保障上の理由により、中央アジアの一部の古代仏教遺跡へのアクセスが依然制限されているか、危険な状況にある。この状況により、IDP (<https://idp.bl.uk/>) や CEToM (<https://cetom.univie.ac.at/>) などの、古代仏教資料に関するオンラインデータベースやデジタルアーカイブの構築が必要となっている。また、中央アジアの仏教僧院への包括的な理解のために、さまざまな分野や背景を持つ研究者間の学際的な共同研究を促進することも望まれる。

(報告:外部評価班責任者 Tao PAN/潘濤 京都大学)
(和訳:Vihāra Project事務局 田代恭菜・田中純也・久間泰賢)

[ヴィハーラ プロジェクト]

印刷 株式会社コムラ **Vihāra Project 第11号**

科学研究費補助金基盤研究(A)

「グプタ朝以降のインド仏教における僧院と世俗性」ニュースレター

編集・発行 Vihāra Project 事務局

〒514-8507 三重県津市栗真町屋町1577 三重大学人文学部 久間泰賢研究室内

2024年9月18日発行

